

太陽は 桑乾河を照す

上 卷

サ ン カ ン

丁 玲 著



坂井徳三譯

太陽は桑乾河を照す

上 卷

丁 玲 著

ハト書房

太陽は桑乾河を照す 上巻

一九五二年二月八日 發行
一九五二年六月二十五日 二刷
定價一五〇圓

訳者 坂井徳三

発行者 吉川綾子

印刷所 長野市鶴賀早苗町一五
しなの新聞印刷株式會社

發行所 東京都千代田區富士見町一の一〇
ハト書房

電九段(33)二一四一九
振替東京二三四六二三番

しなの新聞印刷株式會社製本

まえがき

わたしが、どのようにして、この小説を書いたか、今その、あらましを説明しようと思う。それは、この作品の讀者に何かの手助けとなるかも知れない。

一九四六年七月、わたしは懷來^{ホライ}の土地改革工作團に参加し、次で涿鹿縣^{トクロク}へと轉じたが、九月末には、あわたたしく阜平^{フイピン}へ引き返して來た。この一段の工作は、ついぞ好い結果に終る機會をもたなかつた。けれども、わたしは、阜平^{フイピン}において、他に工作もたなかつたし、同時に、幾人もの人物が、なおもグル／＼と頭の中を廻りつづけるのを覺えたので、この小説を書くよう筆を取る計畫をした。その當時のわたしの希望は、まことに小さなもので、この段階の土地改革工作の過程をえがき出し、同時に、あの一群の人々の活動する一つの村をうつし出し、そして、それらの人物がひどく概念的になりさえしなければ、まずそれでよし、としたものであつた。そしてそれを、まず、第一に斗争、第二に土地の分配、第三に軍隊への参加という三つの段階にわけて書く計畫をした。書いている最中、桑乾河^{サンカン}附近の土地防衛隊の素材を得た。これは非常に生き／＼とした素材で、土地防衛隊の指導者は、すなわち、この小説中の縣宣傳部長・章品^{チャンピン}同志であり、あの一帯の地方には、わたしも、よく行つたことがあつた。そのため、わたしは再びあの地におもむいて、うまく第二部に取りかゝるのかのように幻想した、また、そのために、わたしは書いている最中、いつもいつも思いをはせ、筆を伏せたものである。文章を約半分まで書いたところで、すでに一九四七年の土地調査の時期になつた。わたしは自分で動搖しはじめた。そして、わたしは、それに出かけることによつて、さらに多く大衆斗争を経験し、わたしの生活と小説のなかの不足を補

おうと考えた。そこで、わたしは書くのを中止し、調査にしたがつて河北省中部の行唐^{シンタウ}に行き、そのあたりに獲物を求め、そうしてまた、阜平^{フヘイ}にかえつて来た。わたしは、その時の生活が、わたしにとつて、まったく有意義のものであることを知つたが、この小著にとつての實際の素材としては、そこからあまり多くは得られなかつた。わたしは、また引きつづき書いて行つた。わたしは三カ月半書いて、一と夏全部を送つた。わたしは割り合ひ多くの力を費して第一段階の、斗争を行う部分を書き、これから第二部の土地を分配する部分に移ろうとした時、中國土地法大綱が公布され、わたしは土地會議に参加した。その結果、わたしは、後をつづけて書いて行くことに動搖を生じた。わたしはまず、土地の分配の工作に参加する決心をした。わたしは獲鹿^{フエイク}の或る村に行つて四カ月あまり工作し、ことしの四月末になつて、やつと華北連合大學にかえつて来た。わたしの元々の計畫は、この工作への参加によつて、相當に變更されることになつた。わたしは、元々きめた第二の部分と第三の部分は、まるきり何も書く必要はないとさつた。一昨年のある時の土地分配と軍隊参加は、まつたくのところ不徹底で、大ざつぱで、メチャのまゝ終つた。それは、もとより當時の戦争という環境によるものだが、それらの工作の作風は決して手本にするわけには行かない。再三考慮した結果、壓縮することに決めた、そして他のより新しい素材も仕方なく取り残しておいたが、これはまた別に新たな計畫を進めることにした。このため、作品の最後の所では、問題を發展さして行けないことになつた。その上、世界婦人大會の召集がせまり、出發もいそがれたので、わたしの一應の草稿は一層、その出來上りをせかれることになつた。もし將來、暇ができたなら、ぜひまた手を加えなければならない。今は、これで、よろしく讀者の了解をねがう次第である。

(一)

○時期 この作品にあつかわれた歴史的時期は、一九四六年の上半期における一時期で、國共停戦がいつたん成立（一月）後、全面的内戦となる（六月）までの複雑な政治情勢を反映し、それが、この題材の一部落における底流ともなつて微妙に作用している。そうして歴史的時期からいえば、この年の十月には、この作品にあらわれる地名の張家口や涿鹿などには國府軍が入つて来る。（やがて、二年後の十二月、ふたゝび解放されるが。）

○場所 作品にあつかわれている場所は、北京から北、一〇〇キロにもみたぬ地方であるが、北京との間には長城の大山脈がよこたわつているので、北京周辺とは、その様相が、すっかり違つてゐる。作物も、多作は不可能、夏作だけの一毛作である。日本の東京から考えれば、福島縣下あたりを想像すれば、よいであろうか。日中戦争後あらたに入路軍によつて解放された地域である。

○中國度量衡（新制） 里（リー）日本の約四町。畝（ムー）日本の六・七二二畝。擔（タン）目方として一〇〇斤（チン）、日本の二三・三貫。量として石（タン）と同じ。

石（タン）一石は一〇斗（トウ）、一斗は一〇升（ション）。一石は日本の五斗五升四合。（現代中國辭典による）

○ホーローピン 作中に親しみ深くあらわれるこの果物は、小形のリンゴを考えるとよい。北部中國では、最も安く、たくさん、大衆に食われる果物の一種。この作品では葫蘆冰という漢字でかゝれている。

(二) 主要人物メモ

地主

錢文貴 (チエン・ウェンクイ) 最も陰謀的な人物。息子を入路軍に入れている。農民の鬭争を他の地主に向け

ようとしている。

江世榮 (チアン・シールン) 日本軍時代の甲長。行政的才能を利用され解放後も村長に起用されている。

李子俊 (リー・ズチュイン) 性格が弱い。アヘン吸い。女房が美人で、しつかり者。

侯殿魁 (ホウ・テイエンクエイ) 佛教信者。

富農

顧湧 (クーシユン) 土地への慾望・執着をもつた實直な働き手。息子の二男は兵隊、三男の顧順(クー・ス

イン)は青年會の主任

農民

張裕民 (チャン・ユイミン) 小作農・雇農。抗日戦時代、八路軍との最初の連絡者。村の土地改革工作の指導

者。

程仁 (チョン・レン) 小作農・雇農。村の農民組合の主任。地主・錢文貴の姪・黑尼の戀人。

李昌 (リー・チャン) 何でも手帳に書き留める。唱歌好き。村の黨支部宣傳係。

張正典 (チャン・チョンティエン) 村の治安委員。地主・錢文貴の娘のむこ。錢に屈服。

張正國 (チャン・チョンクオ) 村の民兵隊長。みんなの信用がある。

任天華（レン・テイエンホワ） 村の協同組合主任。才能高い事務家。

錢文虎（チエン・ウエンフー） 村の勞働組合主任。錢文貴の親戚にあたる。

趙得祿（チャオ・トオル） かつて日本軍時代に民主村長として選ばれた。現在は副村長。

趙金功（チャオ・チュイアンコン） 村の黨支部組織係。

趙步高（チャオ・プーカオ） 村の農民組合の組織係。

劉滿（リウ・マン） 一本氣の熱情家。正義派。張正典と對立。

侯忠全（ホウ・チュンチュイアン） 地主・侯殿魁の親戚のじいさん。佛教信者。宿命論者。

侯洞槐（ホウ・チンホワイ） 侯忠全の息子。土地改革の積極分子となる。

李寶堂（リー・パオタン） だまり屋。地主・李子俊の親戚で、その果樹園の番人。のち農民大會の議長。

王新田（ワン・シンテイエン） 小作農。のち積極分子、農民大會議長。

郭貴（クオ・フークエイ） 小作農。のち積極分子。

女性

黑尼（ヘイ・ニー） 錢文貴の姪。文字勉強班の先生。

董桂花（トン・クエイホワ） 婦人會の主任。

羊飼の女房 周月英（チョウ・ユエイン） 積極分子。

顧はあさん 兵隊に行つてゐる顧長生（クー・チャンション）の母。

巡邏工作小組

文采（ウエン・ツァイ） 小組の指導者。知識分子型の人物。

胡立功（フー・リーコン）音楽好きの活動家。

楊亮（ヤン・リヤン）農民出身。かつて圖書館工作。組織者型の人物。

董（トン）さん 雇農出身のもと遊撃隊員。区の労働組合主任。五十才。

その他

章（チャン・ピン）もと三区遊撃隊長。チャハル南部の土地改革工作の指導者。二十才そこそこの青年。

任國忠（レン・クオチュン）小學校教員、地主がわに味方して策動。

劉（リウ）先生 農民がわに味方。黑板新聞の書き手。

赤鼻じいさん 小學校の小便さん。村の會合のどらたゞき。

白娘娘（バイニヤンニヤン）白先生（パイシェンション）を祭るミコ。バクチ宿もやつている。

太陽は桑乾河を照す 上卷

ひどく熱い天氣だつた。八里橋^{ハリーチアサ}から洋河^{ヤン}の岸まで、わずか十二、三里の道のりだつたが、鼻白は、胴も、太もも、みな汗グッショリになつていた。ただし、こいつは、あの胡泰^{フタイ}じいさんとこの飼ひ馬のうち一番の代物で、ドロコ^{ドロコ}の道路ぞい、グイ／＼車を引きつずけて來た。西にかたむいた太陽は、まだ道ばたの柳並木を射通して焼きつけたし、車輪のはね上げる泥水も、むき出しの太ももに生ま熱かつた。だが、車もやつと、どぶ川のような道路から、乾いた所へやつて來た。たえず鼻白をどなつていた願^{ガン}じいさんも、こゝで、ホッと息を抜いた。彼は坐りなおすと、腰のうしろから、タバコ入れを探りとつた。

「とつとつあん！ おと／＼いの、あの雨、すごかつたもんなあ！ まつたく道がひでえ。まるで泥ンコの川だあ。」願^{ガン}じいさんの娘は、子供を抱いて、じいさんの右がわに乗つていたが、少し後ろへ身をずらせた。彼女は、あい色模様のかねきんの新しい服を着こみ、キツチリと刈り込んだ髪を背に波うたせ、前髪はすき上げて高々と引きつけていた。こいつはおもしろい、といった視線で、いま四方を眺めてゐる彼女は、父親について、實家にかえつてゐるところだ。こんなことは一年のうちにも、めつたにない幸運なのだ。

「うん。そら、河にかゝるぞ。洋河^{ヤン}は水かさ、ふえてるだぞ。じつと腰かけてろよ！」じいさんは、

コツ、コツと、きせるを叩きつけた。道が、まつたくひどい！

車輪は二つとも、ほとんど水のなかに没した。鼻白も、大きな背筋を残しているだけで、まるで水に浮いて、あがいているように見える。が、娘が子供を抱きしめ、車のですりを握りしめていると、水は車の後ろの方から、ザーッと前の方へ流れ走つた。じいさんは、むちを馬の兩わきに当てながら、「あ、あ、あ」と、車のゆれる度毎にどなつた。車の前の方の水が、太陽に照らされて、キラ／＼と波をおどらせるので、じいさんは車の路を見定めることができず、汗はしわだらけの顔をつたうし、車は落ちこむし、それをやつと引き上げると、また引つくり返りそうになる。車がどうやら安定したころ、鼻白もようやく水からはい出て、ゆつたりと四つの蹄を淺瀬にふみしめて歩きだした。やがて車は、また砂地の路を行く。風も吹いてきた。その涼しさ！

この道の兩がわも、洋河の北岸と同様に、稻の穂がビッシリと押しあつていた。粟もよく肥え、よく伸びて、人の肩にまで届きそうだ。高粱は、茂つて四方をさえぎり、その葉は、とうもろこしの葉と同じように廣い。土は、しつとりと黒かつた。生い茂つた作物からは、ブンと匂が立ちのぼつていた。この地帯を横切ると、次に、野菜畑にはいつた。こゝでは水溝が、野菜畑の外がわを流れており、畑のなかにはキチャとそろつて、一あぜは深緑、一あぜは淺緑というように並んでいる。願じいさんは、いつもこの地帯を通る毎に、どうしておれは、こんなよい土地にありつけないのだらうと、ついで口に出して羨ますにはおれない。彼の土地にたいする欲望には限りがないのだ。彼は、がまんしきれなくなつて、娘に言い出した。「新保安じや、おめえらの八里橋一帯の土地がえゝだが、おらゝの

珍鹿縣じや、まあこの六區だけつてとこだあ。見な、土がとても肥えてるだから、三年に一回の稻作だが、その一年のあがりや、他の二年分よりやえうだよ。」

「稻を作れや、それや、あがりは大きいだけだな、手間がかゝるだよ。一と晩、二た晩で、すぐ水をかえてやんにやなんねえし、たいていの苦勞じやねえだ。うちの人はな、やつぱし、おらゝの暖水屯の果物畑の方がえうだよ。だれかの話じや、ことしや、また、えれえ出來で、一畝で十畝分だと言うでねえか。」娘は、實家の果樹園を思い起した。樹いっぱいのマッ赤な果物を思い起した。果樹園で憐くヨモギの積み草を思い起した。また、いつかの年、果樹園で果物を取り、山のように積んで、それをかごに詰め、馬で賣りに行つた時のことを思い起した。あゝ、どれもこれも、楽しいことばかりではないか！ だが、ふと、彼女は、ヘシ折られている或る一本の梨の木のこととも思い出して、眉をひそめながら、こうたずねた。

「錢おじさんとこの、あの柳は、もう切り取つただか？」

じいさんは答えず、たゞ、頭を横に振つた。すると彼女の聲が荒々しくひびいた。「フン！ それでも親戚だか！ とつつあん、えゝか、村の幹部に黒白つけてもらうこつたぞ。もし村の幹部が取り上げねえだら、區の方へもつてくだ。」

「いゝや、おら、あのことじや、あれと争わねえだ。一本の樹のことで巧くやろうとも、ほかのことで苦勞させられりや、下の下だぞ。だつてな、梨の木は半分折れたきりだかな、まだ、ことしも、そうとう實がなつてゐるだぞ。え。」一昨年クイ・シユンの春のこと、願クイ・シユンじいさんの息子の願順が水溝を掘つてゐる

時に、水溝の岸に生えている錢文貴チエン・ウエンクイの柳の木を一本、ちよつと動かしたことがあつた。その後、大風があつて、その柳の木が倒れて水溝のこちらがわへ横倒しになり、顧クの家の家の梨の樹に乗りかゝり、樹の半分をヘシ折つてしまつた。すると錢文貴チエン・ウエンクイは顧順グー・シュンに柳の木の辨償をさせておいて、しかも倒れた木を動かさせない。そこで顧順グー・シュンが彼に、どうして自分の柳を元のようにさせないか、と言おうとするのだが、それをどうしても、おやじが許さない。村じゆうの人たちは、みんな、あの梨の樹が一年と枯れてゆくことを知つてゐる、みんな、たいへん惜しいことだと思つてゐる。けれども、誰も、たゞヒソ／＼と言ひあうだけで、いつまでも、そんな、ひまごとに、かゝりあつてなどいなかつたのである。

じいさんは、この時また、娘の方へ顔をふり向けた。そして彼は、年じゆう朝から晩までベタ／＼のその眼で、ジ／＼と娘を見つめていたが、しばらくして眼をぬぐうと、体を元へもどして、ひとりごとのように言つた。「若え者あ、まるで世間を知らねえだかな！」

それを言ふと、彼はまた、注意を自分の前を行く馬に注いだ。車はもう白槐莊バイ・ホワイ・チヤンをめぐる、前方には桑乾河サンカンが横たわつてゐた。太陽は西の山に向つて沈み、道の兩がわの作物の茂みからは、蚊が、かたまりになつて飛び出し、彼らをとりかこんだ。子供は蚊にくわれて泣きだした。母親はハンカチで蚊をはらいながら、河向うの山のふもとの林を指さして、子供に言ひ聞かせた。「もうすぐだぞ、すぐだぞ。そら、あれが、みんな果物の木だぞ、赤い實、青い實がどつさり成つてゐるだよ。あれをもぎに行こうな。取つたなあ、みんな、おらゝの小百子シヤイ・イにくれるだ。な、えゝだか！ な！」

車はまた河におりて、おどり、ハネつすけた。桑乾河も、このあたりはもう下流である。これからさらに十五里下つて、合莊^{ホーチュアン}で、洋河^{ヤン}といつしよになる。桑乾河は山西省からチャハル省南部に流れこみ、この南チャハルをゆたかに肥えさせている。なかでも、この下流地帯は特に肥え太つているのだ。

この時、願^イじいさんの方は、たゞ、鼻白に氣をくばり、これを賞めそやすのにいつばいだつた。彼は心のなかで、このラ馬と、このゴム輪の車輪をつけた車とを讃嘆しつすけていた。まつたく、胡泰^{フータイ}じいさんの、このゴムタイヤ輪の車でなかつたら、きよう、あんな泥ンコ道を通り、河を二つもわたるなどということは、とてもく、むずかしかつたにちがいない！

こゝで、彼らの車は、河の砂地にかゝつた。そして、やがて地面に上ると、そこには、まだ、畑でくわを打っている人たちがいたが、彼らはみな、この車と、車にのつている人たちを好奇の眼で眺めながら、「このおやじ、車を買つたゞな、取り入れもまだゞに、何の金だべ？」と、心でつぶやいていた。けれども、それ以上に考えるゆとりもなく、次第に暗くなる畑のなかで、また腰をまげ、こまかに草取りのくわを動かしていつた。

地勢がだんぐと高くなり、車はゆつくりと、高粱畑を、もちきび畑を、麻畑を、綠豆畑を横切つて行き、やがて野菜畑地帯にはいつた。兩がわは、すべて茂つた果樹林になつていて、ひくい泥の塀が外をかこつているが、塀から枝を差し出している木がたくさんあつた。果實はまだ大半は青いが、なかには、人をそゝりげに赤くそまつているのも見える。果樹園のなかで人々の話している聲が聞き

とれる。彼らは、日一日と大きくなり、日一日と熟してゆく果實を見ているのが、うれしいのだ。車は、この果樹園地帯をすぎて、通りにあらわれた。人々が小學校の門のそとに、たくさん、うずくまっている。その廣場にある芝居台の上はカラつぽで、かべのこちらがわには、また一と群れの人たちがある。協同組合の窓の外にも幾人かがもたれていて、時々窓のなかの人と話をかわしたり、街頭を眺めたりしている。ゴム輪の車は、これらの、むだ話の語り手を、みんなびつくりさせた。ある者はすぐ、とび出して行つたし、またある者は大聲をあげて聞いた。「どつから、こんな車、引つばつて來たど？えゝラ馬だなあ。」

願カガミじいさんは、あいまいに返事しながら、急いで車をとび下りラ馬のおもがいカガミを引くと、さつさと、この十字路を横切つて、自分の家の方へ進んだ。娘は、幾人か知り合いに聲をかけたが、彼らはまだ近寄れないうちに、車は、グルリとまがつた。彼女は、それで、だれに何を話そうにも、これは、なか／＼むずかしいぞと、感じたのである。

二

願カガミ湧シユじいさんは、十四才の時、兄貴について、この暖水屯カウシユエイトンにやつて來たのだが、その時、彼は羊飼にやとわれ、兄貴は常雇いの雇農となつたのだつた。こうして、この兄弟は四十八年間、苦しみつけ、血と汗を荒れ地にそそぎ、その希望を土地につないで、一年一年を送つてきた。彼らは一つの